

「ボン・ジュール、ジェイソン。」

ふかふかの床に引つ繰り返って、荒い息を整えながら天井を見つめていたジェイソンの視界に、突然ピンクの物体が入ってきた。

「わっ！……ああ、マドモアゼル。お久しぶりです。少し遅刻してしまいました。」

「わかっているわ。さ、早く起きて。」

マドモアゼルはジェイソンを立ち上げらせると、彼をリードしてステージの脇、マリアンとフェイスマンがいるのとは反対のステージ脇に連れて行った。二人がそこに到着した時には、その周りにマスナン爺さんやハイデン夫妻、ヤンソン夫妻も集っていた。

「ほら、これ、ブライアンから借りてきたわ。」

と、ハイデン夫人がジェイソンにネクタイとジャケットを渡した。素直にセーターを脱いで、カラーシャツにネクタイを締め、ジャケットを羽織るジェイソン。肩が少し余っているが、さして問題はなさそう。

「他のパーティー参加者の話によると、皆さんがテンピーを見つけて下さったとか。」

ヤンソン夫人から受け取ったミネラルウォーターを一気に飲み、グラスを返しながらかきジェイソンが口を開いた。

「ええ、マリアンとエヴェレットさんがね。灯台下暗し、って思うわよ。」

にこにこしながらハイデン夫人が言う。

その時。

「ご来場の皆様、待ちに待った瞬間がやってまいりました。『どうして？』の主人公兼作者のジェイソン・ヒックスと、彼の幼馴染みテンピーとの再会です。では、まず、ジェイソン、ステージ中央にどうぞ！」

マリアンの声が会場に響き渡り、ジェイソンはマンシヨンの人たちに向かって、うん、と笑顔を見せると、ステージに上がり、中央に進んでいった。さすがパーティーやステージ慣れしているだけあって、突然のことなのに堂々としたものだ。

ステージ上をオリバーがちよこちよこつと走ってきて、ジェイソンにマイクを渡す。

「皆さん、始めまして。『どうして？』の作者、ジェイ

ソン・ヒックスです。皆さん、僕の作品のファンだと聞いて、本当、驚いています。すごく光栄に思っています。『どうして？』を書いて、よかったなあと思ってます。僕一人の力じゃ、僕の大事な親友だったテンピーを探すことはできなかったのに、僕のためにファンの皆さんが遂にテンピーを探し出してくれました。もう何年？ええと、二十五年以上、三十年近いかな？ 当時の面影もお互いに残っていないかもしれません。でも、会えば、テンピーだ、ってわかる、って信じています。」

ジェイソンは一頻り喋った後、マイクを下ろし、軽く頭を下げた。そこに、ユリアがチョコレートバーで作ったブーケを持ってきた。それを受け取り、「グラシアス、ユリア」と彼女の頭を撫でるジェイソン。

「さあ、テンピーの好物も準備できました。では、お待ちかね、テンピーことTPの登場です！」

フェイスマンの襟の後ろを掴んでいたマリアンは、マイクに向かってそう言うのと、フェイスマンを拘束していた手を離した。

リリースされたはいいものの、フェイスマンは困っていた。

『ええと、この流れからすると、俺がTPだって思われているんだよね？ それって、俺がTP（テンプルトン・ベック）だから生じた誤解で、てことは、この盛大なパーティー自体、俺を根拠とした誤解の産物？（↑この時点で鳥肌立った。）でもって今この瞬間、俺はTPとして舞台に出ていって、スピーチ？ って言われても本物のTPのこと何も知らないし、ジェイソンのことだって、いい金蔓っぱかったから引っかけただけで、でもそのジェイソンも俺のことTPって思ってるのか？ うわ、それ、洒落になんないじゃん！ 助けて、ハンニバル！』

一気に状況を理解したフェイスマン、思わずハンニバルの姿を探して舞台袖から会場を眺め回すものの、ハンニバルの姿は見えない。じゃあ他の二人は、と探してみれば、マードックの周りには真空空間ができていし、コングも観衆に紛れて見つからない。

『とにかく、一旦、時間を稼いでハンニバルに相談しなきゃ。』

フェイスマンはそう決意すると、大袈裟に感激した表情を作り、ジェイソンへと歩み寄っていった。

「！もしかし、君がテンピーだったのかい？」

両手を広げて頷きつつ歩み寄るフェイスマンに、信じられない、という表情でジェイソンが応える。会場は、割れんばかりの拍手。

「ジェイソン、僕も知らなかったんだ。全く驚きだよ。今だって感激で失神しそうだ。ああ……気が……遠くなる……。」

そう言うのと、フェイスマンは膝からくず折れた。

「テンピー！」

駆け寄るジェイソン。

「だ、大丈夫、感激で気が遠くなっただけ。ちょっと休ませてくれたら……。」

と、息も絶え絶えにフェイスマン。そんなフェイスマンに、マリアンも駆け寄る。

「わかったわ、ちょっと休んで。あとはこっちで繋ぐから！」

マリアンはそう言うのと、ジェイソンに指示して、ぐつたりしたフェイスマンを舞台から下ろし、控えの間に運ばせた。客席に、ざわめきが広がる。

「済まない、せっかくのパーティーを……。ちよつと休めば大丈夫だから、二人は会場に戻ってよ。」

控え室のソファに横たわり、弱々しく主張するフェイスマン。

「でも……。」

「ジェイソン、君が主役だろ？ マリアンだって、主催者じゃないか。目眩が治まったらすぐに戻るから、先に帰ってよ。」

「わかったわ。無理しないでね。でも、すぐ来てね。みんな、あなたを待ってるんだから。」

「そうだよ、テンピー。みんな僕たちの再会を祝福してくれてるんだ。早く戻ってこいよ。」

そう口々に言う二人をシッシツと追い払い、フェイスマンは目を閉じ、ぐつたりと体の力を抜いた。

待つこと一分。

控えの間から二人が遠ざかったのを確認すると、フェイスマンはむっくりと起き上がった。

「さて、ハンニバル探してトンスラの手筈を考えなきゃ。」

と、その時、会場から聞こえてくる騒がしい音楽。そして歓声。そこに重なるマリアンの声――。

「さて、次の出し物は、キムとテンピーの友人による、エアロピクス・ペアの演技です！ 今年のエアロピ大会で四位入賞した実力を、皆様存分にご鑑賞下さい！」
フェイスマンの計画は、初っ端から頓挫した模様であった。

ミリタリーポリス（MP）はミリタリーのポリスであり、ロサンゼルス市警ではない。そのことをデッカーは時々忘れる。特にAチームを追っている時に。そして、たまに思い出す。特に厭味たらしく指摘された時に。「本当はね、私警察はAチームなんざ追っちゃいないんですがね、でもまあハイジャック事件と関連がある人物の捜索、ということなら、多少は人員を割いて差し上げましょう。」

市警本部にAチームの手配を求めたデッカーは、個室のデスクの奥にいる人物にそう言われた。

「ただし、何も成果が上がらないようなら、今後、陸軍さんのお手伝いに関してはちよつと考えさせてもらわなければいけなくなるでしょうねえ。」

「必ずや、とっ捕まえて、奴らの悪事を洗いざらい吐かせてみせる！」

まるでAチームがハイジャック犯であるかのような口振りで、デッカーは言い切った。警察側からハイジャック事件についての事細かな情報を得た彼の頭の中では、どうやら妄想ストーリーがそれなりに出来上がっているようである。――今回掴まったハイジャック犯は実行部隊であり、黒幕はロシアン・マフィア、そしてAチームはロシアン・マフィアのボスを無事に逃がすために雇われたのである、と。

「ええと、デッカー中佐。」

「大佐だ。」

「失礼。私のところの者を十人お貸しします。彼らには、あなたの指示に従うよう言っておきますが、彼らは飽くまでも警官ですので、軍規には従わないことをお忘れな

く。」

「もちろんだ。」

「では、また後ほど。成果を期待しますよ。」

敬礼しようとしたデッカーだったが、その手を中途半端な位置で止めたまま、むつとした表情で部屋を出ていった。

そして、それからしばらくして。

デッカーは、空港周辺で警官に通行車両をチェックさせている各ポイントを回っていた。今までのすべてのポイントで「異状なし」との報告を受けている。

「どうだ？ 何かあったか？」

空港のすぐそばで、空港に入る車のチェックをしていた警官に尋ねた。

「いいえ、特には何も。ただ、写真を見た女性が、早く見つけてどこぞに連れてきてくれ、ということを書いていました。お待ち下さい、場所をメモっておきましたんで。」

警官は手帳を取り出して、メモを見た。

「そうそう、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルです。」

「ハリウッド・ルーズベルト・ホテル？」

デッカーが怪訝な顔を見ると、横から部下Cが口を挟んだ。

「アカデミー賞授賞式が行われるとこですね。」

「ふむ。」

デッカーの頭の中では、アカデミー賞↓映画↓俳優↓

ジョン・スミス、という流れと、アカデミー賞↓セレブ↓テンブルトン・ペック、という流れの二つができ、豆電球がピコンと点灯した。

「よし、C、その何とかホテルへ行け！ すぐに行け！ 全員急行だっ！」

「は、はいっ！」

部下Cは慎重にバックしてUターンすると、安全運転で来た道に戻っていきながら、無線で部下A・BおよびD以下に「ハリウッド・ルーズベルト・ホテルに全員急行！」と告げた。

検問に残された警官も、デッカーの言う「全員」にどこまで含まれるかわからないが、バーやコーンを片づけ、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルに向かった。他の検

問ポイントにいる同僚たちにも、「検問を片づけて、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルに向かえ」と連絡をして。

話題のホテルでは、「キムが戻ってきた」とオリバーから報告を受けたマリアンが、早速ながら場繋ぎを開始した。キムがこの会場内のどこかにいるのなら、テンピーの友達（ハンニバル）がこの場にいるのなら、曲をかければステージに駆け上がるはずだ、と思って。

マリアンはMCの後、会場音響係（専門職員）に合図をした。前もってキムから預かっていたカセットテープが再生される。

イントロが響き出したその途端、いずこからか黄色いマタギが疾走してきて、ダンツとステージに飛び乗った。バツとマタギベストとロングドレスを破り脱ぐと、その下にはレオタード。いつの間にか、足にはスニーカーを履いている。

ハンニバルはマリアンのMCを聞いて、「なぬっ？」と思った。忌まわしい記憶で頭の中が一杯だ。だがしかし、イントロが始まった瞬間、彼の体は、彼の意に反して動き出した。ローストビーフをこんもりと盛った皿をマサン爺さんに預け、ハンニバルはステージ目掛けて弾丸のように駆け出した。ダンツとステージに飛び乗り、バツとスーツとコルセットを破り脱ぐと、その下にはレオタード。そして足元はスニーカー。

ステージ上の二人はチャリと視線を交わし、うん、と頷いて、イントロが終わった途端、踊り出した。

ドリンクカウンターの前で依然として牛乳を飲んでいたコングは、お約束通り、牛乳をブーッと吹き出した。

「何やってんだ、ハンニバル……。」

ヴォルフの家（ボロアパート）の近くで自転車をかっぱらったロシアン・マフィアの二人は、「施錠せずに路上駐輪しておく者には罰が当たる」とか何とか言いながら、二人乗りでロシア料理屋へ急いでいた。ペダルを漕ぐのはスタンク。全速力で立ち漕ぎしている。今にも自転車壊れそうな勢いだ。ヴォルフは荷台に跨って、なぜか腕を横に広げている。

「おい、ヴォルフ、てめえ何でそんな格好してんだ？」
振り返ってスタングが尋ねた。

「前見ろ、スタング、前！」

電柱にぶつかりそうになって、慌ててヴォルフが注意を促す。

「おう、済まん。で、何だよ、その手。一輪車じゃねえんだぜ。」

「この方がバランスが取れるだろ。ま、ホントのこと言うとうと、手のやり場に困ってな。サドルを掴んだら、お前の尻に潰される可能性もあるだろうし、かと言って荷台の後ろを掴むのも安定が悪いし。お前の腰に腕を回すのなんざ言語道断だし。」

「……勝手にしろ。」

スタングは、ヴォルフが荷台に横座りしていいだけ幸いだ、と思い込むことにした。

ほどなく、ロシア料理店に到着。しかし、ドアには未だに『closed』の札が提がっている。

「何でだ？ もう十時はとっくに過ぎてるぜう？」

「あー、スタング、これ見てみる。」

と、ヴォルフはドアの横の看板を指差した。ランチタイムは十一時半から十五時まで。ディナータイムは十七時から二十二時まで。明らかにぱつきりと、そう書いてある。そして現在、腕時計によれば、十一時二十分。

二人は閉ざされたドアの前で、ひそひそと話し合いを始めた。

「あと十分、待つかな？」

「あと十分なんだから、もう店員は中にいるはずだ。押し入っちゃまえ。俺たちマフィアなんだから、そのぐらいのこたアしてもいいじゃねえか。」

「そうだな、どうせ料理人を脅迫して無理矢理クリスマス料理を作らせるんだしな。」

「どうせ金払わねえんだしな。」

「いや、金は払おうぜ。無銭飲食はマフィアのことじゃねえ。」

「俺たちが飲食するわけじゃねえが、それはともかく、金あんのか？ 俺アねえよ。」

「昨日の八十ドルがまだ残ってる。変な自転車の代金からタクシー代を引いた残りだ。」

「じゃあ八十ドルで、できるだけ作ってもらうか。」

「よし、押し入って、脅迫して、八十ドル分のクリスマス料理を早急に作ってもらうって線でいいな？」

「おう。」

話し合いも決着を見せ、二人がドアの方を向いたその時、ドアが内側から開いた。

「開店時間まであと五分ほどありますが、よろしければどうぞ。」

エプロン姿の女性が、ドアから半身を出して、にっこりと微笑む。

「あ、ありがとうございます。」

「では、お言葉に甘えて、失礼します。」

二人は礼儀正しく店の中に入っていく。

「お二人様ですね。」

「ええと、その、食事に来たわけではなくて、料理を作ってもらいたくて来たんですが。」

席に案内される前に、スタングが切り出した。

「ロシアのクリスマス料理を八十ドル分、急いで用意してもらえませんか？ テイクアウトで。パーティーですぐに出せるような使い捨ての容器に入れていただけると嬉しいんですが。」

要点を告げるヴォルフ。

「はい、わかりました。おかけになってお待ち下さい。」
すんなりとオーダーが通ってしまっ、二人はぽかんと口を開けるしかなかった。

十一時五分、ロシアン・マフィアの二人は、とても八十ドル分とは思えない量のロシアン・クリスマス料理を前にして、キツネに摘まれたような気分だった。

「これ全部で、本当に八十ドルでいいんですか？」

ヴォルフが八十ドルをポケットから掴み出しながら、ウェイトレスの女性に聞くと、奥からのっそりと熊のような男が現れた。厨房服を着ているので熊でないのは確かなのだが、料理人にしてはゴツい。

「声を聞いて、もしやとは思ってたんだが、やっぱりお前たちか、ヴォルフにスタング。」

「ゴーゴリ！」

「あの頃はまだまだガキだと思ってたが、だいぶおっさんになっちゃったな、二人とも。」

彼、ゴーゴリは五、六年前までストコドツコイの右腕であった男で、ストコドツコイの祖母のボルシチをロシアでご馳走になった際に「ボルシチ道を究めたい」と言い出して、その場でマフィアを抜けたのだ。それから音沙汰もなく、どこで何をしているのかと思えば、こんな近くでロシア料理店を開いていたとは。

「このクリスマス料理も親分の命令だろ？ 四百%オマケしといたぜ。もつと早くに連絡くれてりゃ、フルに準備したんだがな。」

「済まねえな、ゴーゴリ。ピロシキ入ってっか？」

紙袋の中を覗いて、スタングが聞く。

「魚のやつ、入れといた。クリスマスにや肉食わねえかな。」

「ヴォルフもそう言ってたぜ。ピロシキはクリスマス料理じゃねえ、ピロシキ食うとしても魚のやつだ、って。」

「奴は確か、いいとこの出なんだよな。」

「何かそれっぽいこと、昨日初めて聞いたぜ。ああ、そう、ロソリとか言うのは？」

「無論、入ってる。十二月二十五日にクリスマスを祝うロシア系アメリカ人も多くてな、有名なクリスマス料理はいくつか準備してあったんだ。」

「クリスマスってたら、一月七日だよなあ。」

「そうそう、その通り。七日にやあ、ここでクリバ開くから、組のみんな誘って来るらしい。」

「おう、そうさせてもらうぜ。」

やっとのことで、支払いを終えて領収書を切ってもらったヴォルフが戻ってきた。ウェイトレスに領収書の名宛を書かせるので手間取っていたのだ。

「じゃ、行くか。スパシーボ、ゴーゴリ。またな。」

二人は両手に二つずつ紙袋を提げて、店を出た。が、しかし、この状態では自転車に乗れない。タクシーを拾おうにも、もう一セントも金はない。仕方なく、二人は徒歩でハリウッド・ルーズベルト・ホテルに向かっていった。

音楽が止まり、会場から歓声が上がった。大開脚でにっこりと笑顔を作っていたキムが、観客に向かって手を振る。大開脚でニツカリ笑顔を作っていたハンニバ

ルも、よつこらしよ、と立ち上がって観客にアピールしようとしたものの、体力がついて行かず、足がもつれてそのまま体育座りへ。

それを見たキムは、自分も体育座りに姿勢を変えると、舞台袖に向かって合図を送った。次の曲が流れ始める。体育座りのまま笑顔で肩をゆすり始めたキムとハンニバルは、ヴォーカルの開始と共に跳び上がり、頭の上でパンパンと拍手をしながら大股で歩き回る。そして、舞台の両端に分かれると、勢いをつけて側転。そのまま舞台上でクロスし、反対側から再度の側転。その間も、顔に張りついた笑顔は不変だ。華やかな演技に、会場から拍手が起る。

「何やってやがんだ、ハンニバル……」

コングは、もう六杯目にもなる牛乳をぐくりと飲み込んだ。その時、コングの傍で控えめなアピールをする男性が。ミラー氏である。

「何でい、俺に何か用かい。」

「用じゃあないんですけど、ミルクってどこで貰えるんでしょうか？ ドリンクコーナーに行ってもなかったし。」

「ああ、ノンアルコール・ドリンクは、あっちの台だ。」

「どこ？」

「舞台の脇の、ケーキやら果物やら置いてあるやつだ。」

「ああ、あそこか。ありがとうございます。」

ミラー氏は、コングにこやかに礼を言うと、人混みを掻き分けて舞台の前まで進んでいった。

その時のフェイスマンと言えば、半分諦めに似た心境で、舞台袖から踊るハンニバルを見つめていた。カーテンをはつしと掴んで、その陰に半分隠れて舞台を見つめる姿は、まるで明子姉さんのよう。自分の切羽詰まった心境などお構いなく、目の前で上司が吹っ切れた表情で狂ったように踊っているというのは、人の心を必要以上にやさぐれさせるものだ。

フェイスマンは、ハンニバルの汗にまみれた後姿に冷ややかな視線を送りつつ、それでも舞台上から目を離さず、練り広げられるエアロビ・スペクタクルを凝視していた。なぜって、ちよつとでも目を逸らすと、反対側の

袖にいるジェイソンと目が合ってしまうから。ジェイソンは、未だかつて見たこともないようなキラキラした視線でフェイスマンを見つめている。目が合えば、ブンブンと手を振ってアピール。フェイスマンは、そんなジェイソンの態度がいたたまれず、ついまたハンニバルの腹踊り（かなり失礼）を眺めてしまうという悪循環。

音楽が止まり、キムとハンニバルが再びフィニッシュのポーズを決めた。今回は、三点倒立から、ぐるりと捻って横寝そべり（って言うのか？ あ、の、休日のお父さんがTVの前で転がってる格好）で静止し、観客の拍手を待ってから一気に跳び起き、客席にぶんぶん手を振りながらスキップで退場。もちろん顔は、満面の笑顔のままで。

「ハンニバル、大変なんだよ、あのね……」

やっと捕まえたハンニバルに状況を説明すべく問いかけたフェイスマンの言葉に、ハンニバルはフェイスマンの方を見た。しかし御大、そこまでであった。三十分を超える完全燃焼は、妙齢の体には負担が大きすぎたようだ。ハンニバルはフェイスマンに向かって親指を立て、「完璧な演技だったろー」とアピールした直後、その場にぱったり倒れ込んで昏倒した。慌てて駆け寄り、酸素マスクを当てるキム。

「だ、大丈夫なの？」

「平気よ、ちよつと酸欠になっただけ。すぐに気がつくわ。それよりあなた、出番よ！」

そう言っただけで、フェイスマンの背中をドガンと叩くキム。気がつけば、舞台では再度現れたマリアンが、観客の拍手を浴びている。

「それでは、改めて紹介しましょう。ジェイソン・ヒックスと、三十年振りの再会を果たしたその親友、テンピの登場です！」

ファンファーレが鳴り響き、フェイスマンは、いつの間にか現れたホテルの職員に両脇を抱えられ、舞台の中央へと運ばれていった。

ノンアルコール・ドリンクが並んだテーブルに到着したミラーは、白い液体の入ったグラスを手にとった。ちよつと匂いを嗅いでみる。間違いない牛乳だ。ココナツ

ミルクでもヨーグルトドリンクでもなく。

「あ、ミラーさん。」

斜め下で声がした。オリバーだ。人の顔を覚えるのが苦手なミラーでも、オリバーのことは「回覧板を持ってきて、さらに持っていくてくれる子」と覚えていた。名前は覚えていないけど。

「やあ。」

ミラーは、それだけ言った。それ以上に言うべきことなどないし。

「カメは元気ですか？」

オリバーの脇にいた女の子が言った。ユリアである。しかし、ミラーはユリアのことを覚えていなかった。

「うん、元気だよ。」

「ちっちゃくって、可愛かったよね。」

オリバーとユリアが、顔を見合わせて「ねー」と言っている。それ以外にも、オリバーが何やら喋りまくっている。既にミラーのことを無視して。

ミラーとしても、子供と喋るよりは子供に無視されていた方が楽なので、舞台の方に目をやって、牛乳をコクリと飲んだ。

牛乳はチョコレートバーによく合うのだ。普段はパプシコーラやポカポラばかり飲んでるミラーだが、先刻、チョコレートバーでできたブーケを目にして、急に牛乳が飲みたくなったのだ。

「こんなとこにいたのか。」

聞き覚えのある声を見ると、クツワダ氏がいた。

「急にいなくなったから、どこへ行ったのかと思った。」

ミラーにそう言うと、彼はテーブルの奥にいたウェイターに、ミネラルウォーターを注文した。

「本当は、グリーンティーかウーロンティーが欲しいんだけどね。」

ウェイターに聞こえないように、小声でミラーの耳元に囁くクツワダ氏。しかし、そんなことをする必要もなかったのではないかと思われる。なぜなら、今、会場内は沸きに沸いているからだ。

舞台中央にはマイクを持ったマリアン。そして彼女の両隣にはジェイソンとテンピー（フェイスマン）。ジェイソンは、「お前、そんな顔もできるのか」と仕事仲間

に言われること請け合いの、飛びっきりの優しい笑顔。それに引き換え、テンピーは非っ常に不安げな眉毛に、作り笑いの口許。

「テンピー、目眩はもう大丈夫なのかしら？」

マリアンがフェイスマンの方を向いて、マイクを向ける。

「う、うん、何とか。お騒がせしました。ええと、その、感動と嬉しさのあまり気が遠くなってきたわって。」

□八丁のはずのフェイスマンだが、これだけの群衆を前に嘘をつくのもそうそうないことで、□調が自分のものじゃなくなっている。

「無理はしないでね。」

マリアンの言葉に、ジェイソンはテンピーを見つめて、うんうん、と頷いている。その視線は半端ではなかった。

「それじゃあ、ジェイソンとテンピー、せっかくこうして出会えたのだから、昔話に花を咲かせてちょうだい。」

「え……昔話？ そんなのを聞いても、ねえ、みんな面白くないんじゃないかな？」

心の中では「ヤバイよ、ヤバイよ」と思い続けているフェイスマン、会場の皆さんに向かって問いかけてみた。だが、しかし。

「聞きたーい！」

満場一致で声が返ってきた。

「あとで、ジェイソンとテンピーに質問コーナーもあるからね！」

マリアンがそう言うと、会場内に「わーっ」と喜ぶ声があふれた。

「まず、僕たちが出会ったのは、皆さんもご存知のように、孤児院なんですけど。」

フェイスマンの意も全く汲み取らず、ジェイソンが意気揚々と話し始めた。

「そう、孤児院。」

「僕が孤児院に入った時、先にテンピーが、あ、テンピーって呼んで構わないかな？ 昔みたいにくたれたくないんでね。」

「あ、うん、構わないよ。」

「じゃ、遠慮なくテンピーって呼ばせてもらうよ。それ

で、テンピーが先に孤児院に入っていてね。新入りの僕に声をかけてくれたんだよ。」

「何て？」

あろうことか、マリアンがフェイスマンの方にマイクを向けた。

「ジェイソンとテンピーの初めての会話、教えてちょうだい。」

「えーと、その、うーん、そんな昔のこと、覚えてないなあ。」

そう、だってもう三十年も前のことなのだ。そんなこと、いちいち覚えていられるはずがない。

『「ハロー、チビ助」って言ったんだ。』

牛乳のグラスの中に、ミラーは呟いた。

「え？」

クツワダ氏がミラーの方を見た。だが、ミラーは眉を顰めているだけだった。

「僕は覚えてるよ。だって、もしかしたら孤児院で僕は一人っきりかもしれないって思ってたからね。君が声をかけてくれて、すごく嬉しかったんだ。」

舞台の上では、ジェイソンが蕩けそうな表情で説明していた。

「で、ジェイソン、何て言われたの？」

『「ハロー、チビ助」って。あの頃、僕、背が低かったんだ。だから僕、テンピーは背が高くて、しっかりしてて、大人びてるな、って思ってたんだよ。僕があまりにもチビだったんで、よくいじめられたけど、いつもテンピーが助けてくれてたんだ。ありがと、テンピー。」

「ど、どういたしまして。」
今ではすっかりノッポになってしまったジェイソンを見上げて、フェイスマンは言った。

「いじめっ子の名前は覚えてる？」

「またもやマリアンがマイクをフェイスマンに向けて尋ねた。」

「ええと、何てったっけなあ……。」

フェイスマンは「うーん、マンダム」のポーズで考える振りをした。考えたって思い浮かぶはずがないけど。

「レオとチャドとエルマー。」

ミラーがぼそりと呟く。

「え？」

クツワダ氏は、再度ミラーの方を見た。依然として彼は、眉を顰めて、舞台の方を見つめているだけだった。

「ああ、覚えてないや。僕がいじめられてたわけじゃないしね。」

諦めたようにフェイスマンは首を振った。ダメだ、という風に。

「僕は覚えてるよ、すごく嫌な奴らだったからね。チャドとエルマー、それからガキ大将のレオ。君が奴らに仕返ししてくれたりもしたよね。」

「何をしたの？」

向けられたマイクを見て、フェイスマンは溜息をついた。

「僕の口からはちよつと言えないよ。みんなのテンピー像を壊したくないからね。」

これはいい手だぞ、と、フェイスマンは内心、自信を持って言った。

「靴の中に虫を入れたり、ベッドに水を零したり。」

さらに呟くミラー。それも、即答。

「え？」

クツワダ氏だけでなく、オリバーとユリアも彼の方を見た。それに気づく様子もないミラー君。

「そんなことじゃ、テンピー像は壊れないさ。見事な手口だったしね。奴らがシャワー浴びてる間に、奴らの靴に虫を入れて。ぐちゅつと踏み潰した頃合いを見計らって、『靴や服に虫ついてなかった？ さっき僕、靴の中に入ってた虫、踏み潰しちゃったよ。虫が大発生してるのかな？』なんて、奴らに言いに行ってきた。あと、レオのベッドにグラスの水をわざと振り撒いて、『ごめん、蹟いて水零しちゃった、本当にごめん、何だったら僕のベッド使って』って謝りまくったりね。謝りまくられちゃ、レオだって君のベッドで寝る、なんて言うわけないし。だから、君は決して奴らに嫌われなかった。それに、シスターたちにも受けがよかった。あの頃から君は頭がよかったんだね。僕はバカだったから。」

「うん、バカだった。自閉症だったし。」

真剣な顔でミラーは呟いた。クツワダ氏とオリバーとユリアは、ただ呆然とミラーのを見つめていること

しかなかった。

料理を崩さないように細心の注意を払いながらも、ヴォルフとスタングはジョギングに近い速さで歩いていった。もう喋っている余裕もないほどだ。

その甲斐あって、二人は午後一時前にハリウッド・ルーズベルト・ホテルに到着した。脚にも腕にも、たつぷりと乳酸が溜まって、筋肉がパンパンだ。

「はあっはあっ、朝十時からやってる、はあっはあっ、パーティの会場って、はあっはあっ、どこでしょうか？」ドアマンに会場の場所を尋ねるヴォルフ。息が上がっても丁寧な言葉遣い。

場所を聞いて、二人がドアマンに礼を言った時、ホテル前の車道に車が何台も滑り込んできた。陸軍の車と、警察の車だ。急ブレーキをかけて停まった車から、ドヤドヤと軍人や警官が降りてくる。そして、ホテル前の歩道に整列。

ロシアン・マフィアの二人は「こりゃマズい」と思い、そそくさとホテルの中に入っていった。早く料理を置いて、多分、既に会場の中にいる親分に報告しなくてはならない。さもないと、親分と共に彼らまで警察に捕まってしまう。

『それにしても、何で軍隊が？』

会場に急ぐ二人の頭には、クエスチョンマークが微かに浮かんできた。親分を取り押さえるのに軍隊の協力が必要、と警察が考えたのだろうか。それとも、別件の捜査だろうか。

ともあれ、受付には「料理の配達です」と言って入場無料で通させてもらい、ヴォルフとスタングはロシアのクリスマス料理をWTPP会場に運び込んだのだった。さあ、この人混みの中から親分を探せるのであろうか？

「お？ この臭い。」

鼻をクンクンさせていたスタングが、とあるテーブルの方を向いた。

「これ、キビヤじゃねえか？」

「キビヤ？ この悪臭、キビヤってのから出てるのか？」

「何だ、お前、キビヤ知らねえのか？」

「ああ、知らん。こんな肥溜めより臭いもん、知ってたまるか。」

「親分が、キビヤ好きだったってんだよ。」

「何だそりゃ、料理か？」

「ま、そんなとこだ。この臭い辿ってけば、親分がいるはずだ。」

「よし、臭いが、行くしかねえな。」

先にごんと進んでいくスタングの背中に、ヴォルフは鼻で息をしないようにしながら、ついて行っただ。

舞台上では、ジェイソンの昔話が延々と披露され、テンピー（フェイスマン）はもう黙って首を横に振るしかできなくなっていた。「戦争で頭を打って記憶をなくしたんじゃないか」とジェイソンにフォローされながらも「どうもありがとう、ジェイソンとテンピー。それじゃあ、そろそろ、皆さんお待ちかねの質問コーナーとまいますしょう。」

舞台袖のキムから何やらサインを受けて、マリアンが言う。

「まずは私から、いいかしら？」

WTPP参加者たちは、我先にと暴動を起こすことなく、各々が頷いていた。

「クリスマスにまた会おうね」って約束したのに、ジェイソンは会いに来なかったじゃない。それ、どう思ってる？ 本当のところ、教えて。」

マリアンがそう聞くと、ジェイソンは苦笑した。

「いや、別に怒ってはいなくて、そう、何と言うか、ジェイソンは新しい家族と幸せにクリスマスを過ごしてるのかな、と思って……。」

これは嘘をついても誰にもバレないな、と多少安心してフェイスマンは答えた。

「違う。ただ忘れてたんだ、チビのジェイソンのことなんか。」

舞台下では、ミラーが呟いていた。顔を見合わせる、クツワダ氏とオリバーとユリア。

舞台上では、フェイスマンの返答に感動したジェイソンが、フェイスマンを抱き締めている。それを見て、涙

を零すマリアン。

「ぐすっ、それじゃ次の質問は……。」

参加者のほぼ全員が挙手をする。

「はい、あなた。」

マリアンに指された婦人が、「え、私？ あら、まあ、どうしようかしら？」といった動きを見せる。そこへ、マイクを持ったキムが軽やかに走り寄る。

「あの、テンピーさん、お名前は何かと仰るんでしょうか？ イニシャルがTPなのは知っていますが……。」

その質問に、マリアンはうふふ、と笑った。まだ涙は流れているのだが。

「実はWTPPスタッフはテンピーの本名を既に知っているんですが、ここはお二人、声を合わせて言ってもらいましょう。ジェイソン、もちろんあなた、知ってるわよね？」

「うん、知ってるさ。」

「じゃ、せーの、で言って下さい。いいですか？ せーの。」

「テネシー・ファーランクス！（大声 by ジェイソン）」

「テンブルトン・ベック。（小声 by フェイスマン）」

会場がざわつき始めた。

「ええっ？ ジェイソン、間違えてない？」

動揺のあまり、マリアンはマイクをフェイスマンに向けて、ジェイソンに聞いた。

「間違えるわけないだろ、テンピーの本名はテネシー・ファーランクス。」

「ファーランクスだったらPじゃなくてFじゃないの？」

「ファーランクスの綴り、PHALANXだからPでいいんだよ。」（×二）

ジェイソンの言葉とミラーの言葉がダブった。

「そして、ミラー家に引き取られた、と。」

ミラーはそう呟くと、クツワダ氏の方に顔を向けた。「どうやら僕がテンピーのようです。……別人のことだと思ってただけだ。」

クツワダ氏は目を丸くして固まっていたが、オリバーは行動を開始した。このざわついた状況で、ミラーの声がステージ上まで届くはずがない。だけど、この事実

今みんなに伝えなきゃいけない。ユリアを置いて、オリバーは走った。キムのところへ。そして、キムからマイクを奪うと、ミラーの前に戻った。

「会場の皆さん、聞いて下さい。僕、オリバーって言います。今、すごいニュースが入りました。」

スピーカーからオリバーの声が響く。

「どうしたの、オリバー？」

マイクを通して、マリアンが尋ねる。

「びっくりしないでよ、マミー。本物のテンピーがここにいるんだ。」

「何ですって？」

「それじゃ、僕からの質問です。ジェイソンは今、ジェイソン・ヒックスって名前だけど、昔の苗字は何だったでしょうか？ ジェイソン、答え言っちゃダメだよ。」

「わかったよ、オリバー！ 本物のテンピーなら知っているはずだ。」

オリバーはマイクをミラーに渡した。

「ミラーさん、ジェイソンの昔の苗字は何？」

「ヘイズ。ジェイソン・ヘイズ。」

さらっとミラーが答える。

「正解！」

ジェイソンが叫んだ。そして、会場は歓声に包まれた。ついでに、フェイスマンはここそと舞台袖に引っ込んだ。

「いた！ 親分〜！」

スタングがストコドッコイを発見し、駆け寄ろうとしたものの、両手に持った料理のせいで走れず。

「遅いっ！」

口と口の周りと手を赤黒く染めたストコドッコイが、冷たく言う。

「済いやせん、親分。」

世界醗酵料理の横の空いたスペースに袋をそつと置くスタングと、少し遅れてヴォルフも料理をテーブルへ。「ゴーゴリがうちの近くでロシア料理屋をやってて、そこで作ってもらいやした。」

手提げ袋から料理を取り出し、テーブルの上に並べていくヴォルフ。

「ああ、ゴーゴリね。店出したんだ、遂に。」

「一月七日にクリパやるんで、組のみんなまで来てくれて言うってやった。」

ヴォルフの手伝いをしながら、スタングが言う。

「へえ、そりゃいいね。おっ、ロソリもちゃんとあるさ、食べて食べて。」

と、ストコドッコイはマードックとハナコを促した。「ところで親分、実はこんなゆっくりしてられねえんださあ。」

蓋を重ねて脇に置き、スタングが小声で切り出した。「表に警察と軍隊が集合してましてね、恐らく、親分を捕まえに来たんじゃ……。」

手提げ袋を畳みながらスタングの後を続けるヴォルフ。

「軍隊？ もしかしてMPとか？」

アパリアスを持つのと同じ手つきでピロシキを握って、マードックが聞く。

「そう言えば、車にMPって書いてあったな。」

ヴォルフの言葉に、スタングが頷く。

「それ、オイラたちを捕まえに来たんだ。やっべ。大佐に報告しなきゃ。」

マードックはピロシキを握ったまま、舞台の方へ駆け出した。その後を最大速度で歩いて追うハナコ。

「軍隊の方は彼ら目的だとしても、警察は僕たちを捕まえに来たのかもね。でも、これだけ人がいるから、踏み込まれても大丈夫。するつと逃げちゃえばわかんないつて。それより、お前たちも食べなよ、ゴーゴリの料理。」

「は、はい……。」

ストコドッコイが大丈夫だと言えば、それは大概大丈夫なんだが、やはり不安は拭えない部下二名。しかし、空腹なので、とりあえず料理を食べることにした。

「大佐！」

舞台袖に到着したマードックは、床に倒れているハンニバルを発見した。酸素マスクを嵌めたまま、意識はない。さらに言えば、酸素ボンベからもう酸素は出ていない。

ハンニバルのエアロビ・ダンスを視界の端で見ていた

マードックは、なぜハンニバルがこのような状態になったかを理解し、とにかく意識を戻さなければ、と、ハンニバルの頬をべちべちと叩いた。だが、それぐらいでは起きてくれない。寝ているわけではないのだから。

「気つけ薬か何かあるといいんだけどなあ……。」

ピロシキをもぐもぐと食べながらも、珍しくマードックの脳味噌が正しくフル回転する。

「あ、あるじゃん、気つけ薬！」

ダッシュでマードックは来た通路を戻っていった。そして一分後、壺と箸を手にもったマードックはハンニバルの横に跪いていた。壺には、ハングル文字の書かれた札が貼ってある。ホンオ・フェだ。

箸で壺の中からエイの刺身（醗酵済み）を摘み出すと、ハンニバルの半ば開いた口の上に乗せ、箸でぐいぐいと押し込んだ。そして、もう一切れ、壺から出し、ハンニバルの口に押し込む。しかし、ハンニバルは意識を取り戻さない。

「おっかしいなあ。アンモニアで合ってるはずなんだけどな。」

そう、アンモニアは気つけ薬に使われている。でもって、ホンオ・フェはアンモニアに満ち満ちている。それならば、ホンオ・フェも気つけ薬に使えるはずだ。

じつとハンニバルと壺とを見比べると、マードックは壺の口をハンニバルの顔面に被せた。壺の中の刺身が、ハンニバルの顔の上にべちべちと落ちる音がした。数十秒経過。

「ぶわっ！」

ハンニバルが撥ね起きた。ゴロゴロと転がっていく壺、そこいら辺の床にボタボタと落ちる刺身。

「何だ、この沁みるのは？」

手で顔を拭くハンニバル。口に詰まった物体も吐き出す。

「ホンオ・フェ。エイの刺身。」

「刺身か。」

ハンニバルにとっては、それだけでOKらしい。「確か、あたしはキムと踊って……。」

「酸欠で倒れたんじゃない？」

「そうらしいな。」

「つて、落ちていて話してる場合じゃないんよ、大佐。MPが来てるつて。」

「何だと？ デッカーか？」

「デッカーかどうかはわかんねけど、MPが警察とつるんでホテルの前まで来てるつてさ。」

と、そこに、フェイスマンが現れた。舞台の方から。

「ハンニバル、大丈夫？ 意識戻ったの？」

「戻ったってーか、戻した。」

「もう、まいっちゃったよ。俺がテンピーなわけないのにさあ、みんなで誤解してくれて。ハンニバルは酸欠で倒れちゃうし。」

「フェイス、それは後で聞いてやる。MPが来てるそうさ。」

両手を広げて「可哀相な俺」をアピールしていたフェイスマンだったが、ハンニバルの真剣な声を聞いて、手を閉じた。

「マジ？ 何でここに？」

「知らん。理由はともあれ、来てるらしい。」

「じゃ逃げなきゃ。」

「その通りだな。モンキー、コングは？」

「知らね。」

「コングなら牛乳飲んでた。そこら辺で。」

コングがいる辺りを指差すフェイスマン。

「ここに連れてこい。」

「わかった。」

ほどなく、フェイスマンがコングを連れてきた。

「何だ、この臭えの。」

「ホンオ・フェ。エイの刺身。」

「刺身か。」

コングにとつても、それでOKらしい。

「コング、フェイスから聞いたと思うが、MPが来てるそうさ。」

「じゃ逃げなきゃな。」

「その通り。車は？」

「当然、駐車場だ。」

「てことは、MPに車を押さえられてる可能性もあるな。」

「ちっとと見てくるぜ。」

コングが行動を起こそうとした時、Aチーム以外の人物が現れた。

「こんな所にいらっしゃったんですか。」

ハナコさんである。キノノの裾を絡めて、あられもない姿。おぐしも乱れているし。

「あー、ハナコちゃん、今、俺たち、ちよっち忙しくてさ。」

マードックが立ち上がって、継り寄ろうとするハナコにストップをかける。

「どうなさったんでしょうか？ 私でお力になれるようでしたら、何なりとお申しつけ下さいませ。」

それを聞いて、何を考えたのか、ハンニバルがニツカリと笑った。

舞台上で感動の再会シーンが繰り広げられているその頃、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルはMPとLA市警の連合部隊にすっかり包囲されていた。指揮を執るのはデッカー大佐。その補佐に当たっているのが、LA市警のマコミック警部である。

「皆の者、配置についたか！」

無線に向かってデッカーが叫ぶ。ガーガーと入りの悪い無線機から、ホテルの正面玄関を固めている部下たちの返答が次々に聞こえてくる。

「よし、五分で突入だ！ 待機しておけ！」

デッカーは、そう叫ぶと無線を切った。

「Aチームの奴らめ、今度こそ一網打尽にしてくれるわぶわはははは。」

デッカーは、悪代官ばりの高笑いと共に、無線機のマイクを車の中に放り投げた。

「痛っ。」

デッカーと車の間にぼーっと突っ立っていたマコミック警部は、飛んできたマイクを側頭部に受けて、少々よろけた。

「痛いなあもう、何するんですか。」

「避けない方が悪い。」

デッカーの言い草にムツとしたマコミック警部は、自分も何かぶつけてやろうかとポケットを漁ったが何も出てこず、諦めてデッカーに向き直るとこう言った。

「突入って何ですか。ここは我がLAが誇るハリウッド・ルーズベルト・ホテルですよ？ しかも今日はLAを代表する詩人（いつの間に）ジェイソン・ヒックスのパーティが開催されているんです。勝手に突入なんかしてもらっちゃ困ります。」

「困るとは何だ、困るとは。そのパーティには重大な戦争犯罪人が紛れ込んでいるんだぞ。」

「戦争犯罪だか何だか知りませんが、ここは文化と芸術の都LAですから。そこそこは、尊重してもらわないと。とにかく、パーティが終わるまで突入は控えて下さい。」

「貴様、それでも軍人かっ！」

「違います。」

マコミック警部は、しれっとそう答えると、デッカーが投げ捨てた無線機のマイクを取り上げた。

「チャミー、聞こえるか。」

「聞こえるぜ、警部。」

応じたのは、裏口を固めている市警チームのリーダー、チャミーである。

「パーティが終わるまで突入はなしだ。潜入して進行を見守れ。お開きになったらすぐ連絡しろ。」

『オッケー。』

通信を終えたマコミックは、怒りに震えるデッカーに向き直った。

「というわけで、突入は終了後ということ。なあに、あと一時間もすればお開きですよ。長つ尻はハリウッドらしくないんでね。」

しかし、そうは問屋が卸さないのがWTPPの恐ろしさ。

パーティ会場は、時間が経つにつれてさらに大盛り上がり。真のテンピーが、人気マンガ家のミラーさんであったことが知れると、そこは侮れぬオタクの情報網。パーティ会場にはいつの間にか『キャプテン・ロンバース』のファンまでもが集結しつつあり、押すな押すなの大盛況、いつ終わるとも知れぬ饗宴が繰り広げられていたのである。

そんな中、そっと会場に潜入する影あり。LA市警の

チャミー警部補である。もちろんパーティーの終了を見届けて突入タイミングを本部に知らせるのが彼の任務。しかしチャミー警部補には大きな欠点があった。それは、彼がLA市警きつてのマンガ・マニアであったということである。

「うわ、あれが『キャブテン・ロンバース』の作者かよ。ヤベ、サイン貰わなきゃ。」

早速、任務は二番手以降に追いやられ、ただのファン状態に戻ったチャミー警部補は、ミラー氏とジェイソンの前にできているサイン待ちの列に加わったのだった。

「皆さんは、ここに隠れて下さい。」

と、ハナコは大きな箱を指差した。舞台袖までその箱を引っ張ってきたせいで、着物の合わせはさらに着崩れ、かなり壮絶な様相。

「これって、ホテルのゴミ集積場にあるゴミ箱だよな？」

と、フェイスマン。確かにどう見ても、幅五フィート奥行き三フィート高さ三フィートのゴミ箱。ただし、蓋と車輪もついている。

「ええ、ゴミ箱です。」

「いくら何でも安易すぎない？　今時、ゴミ箱に隠れて脱出なんて。」

「確かに。開けられたら終わりだしな。」

ハンニバルの言葉に、ハナコはにっこりと微笑んだ。「このままの箱が通れば、警備の方(う)は必ずや開けたくなるでしょう。しかし、こうすればどうでしょうか。」

ハナコは、そう言うのと、傍らに置いてあったゴミ袋の中身を豪快に空けた。灰褐色のびちゃっとした物体が、べちゃっとゴミ箱の中に落ちる。途端に、爆発的に広がる腐敗臭。

「ぐふおっ！」

「うええええ。」

ハンニバルとフェイスマンは仰け反った。

「な、何だい、これ？」

「キビヤックの皮です。アザラシ袋の部分。それから、これも。」

次にハナコが空けたゴミ袋からは、でかい魚のヒレの

ようなものがボタボタとゴミ箱の中に落ちた。百五十年間、掃除せずに放っておいたトイレのような強烈なアンモニア臭が一気に広がる。

「げほっ、げほっ。」

「な、泣ける。これ、何？」

「ホンオ・フェのヒレだね。ここは食べないから。」

と、ハナコに代わってマードック。

「ってモンキー、何でこれ平気なの？」

フェイスマンの疑問に、マードックは天井を見上げて答えた。よく見れば、鼻の穴に何やら黄色い物体が詰まっている。

「鼻栓か。」

「耳栓だけだね。」

「さ、皆さん、早く入って下さい。」

ハナコはそう言うのと、ホンオ・フェのゴミ袋の底に残った汁までも余すことなくゴミ箱に注ぎ入れ、どうぞのポーズで皆を誘う。

そこへ、車を見に行っていたコングが戻ってきた。

「ハンニバル、駐車場に続く通路にや警官が張ってる。」

「バンは？」

「柱の陰に停めてあるから、まだ気づかれちゃいねえようだぜ……って、ぐほっげほっ、また刺身か、この野郎。」

刺身、えらい言われようである。

「とにかく入って！」

Aチームの面々は、ハナコに促されるまま、狭いゴミ箱(刺激臭つき)の中に押し込まれた。ちんまりと箱に納まる四人。

「私がゴミを出す振りをして皆さんを駐車場まで運びますから、合図をしたら出て下さい。それから、これも持っていて。」

と、ハナコが取り出したのは、まだ開けていないシュールストレミングの缶詰十個。どれもこれも、中でガスが発生しすぎて、ボコボコに変形している。

「冷凍しておいた分なんですけど、そろそろ常温に戻っているんで、少しの刺激で爆発します。何かの足しになるかと。」

「爆発？」

「少しの刺激って、どれくらいいよ？」

「さあ、それはわかりかねますが、とにかく、お持ち下さい。じゃ。」

ハナコは、そう言うのと、四人の上から他のゴミ袋をガンガン詰め込み、蓋を閉めた。

飲食に没頭していたヴォルフは、四切れ目のミンスミートパイを飲み込むと、会場を見回した。ストコドッコイは、いつの間にかキンケイド氏に捕まって談笑しているし、スタングは、いつの間にか何かの列に並んで順番を待っている。すっかりパーティーを楽しんでいるロシアン・マフィアである。

「しかし長いな。何の列だ？」

ヴォルフは、喉に引っかかったパイの切れっ端を甘いパンチで飲み下すと、スタングの並んでいる列を目で辿り、そして噓せた。

「うっ！　げほっごほっ。」

それに気づいたストコドッコイが、顔を顰めて部下をいなす。

「物は落ち着いて食えと、普段から言っているだろう。……済まないね、行儀の悪い部下で。」

キンケイド氏は、胸を叩いて苦しむヴォルフを見て、にっこりと微笑んだ。

「いいんですよ。あのパイは美味しいですもんね。あれも、私のマンションの人が作ったんですよ。」

「へえ、そりゃ結構。君んとこのマンションは芸達者揃いなんだね。」

「ええ、おかげさまで。でも私は石油売る以外、何もできませんけどね。」

「おっ、おっ、親分。」

ヴォルフが、無理矢理二人の間に割って入った。

「何だ。」

「親分。あれ、あれ。」

「ん？」

「あれ、ほら、あれ、あそこで写真撮ってもらってる奴！」

ヴォルフの指差す先では、チャミー警部補がTP(ミラー)の肩を抱き、カメラに向かって笑顔でポーズを決めていた。

「ん？……あゝ、チャミーかあ。」

「誰？」

と、キンケイド。

「L市警の刑事。僕の天敵マコーミックの部下。」

「へえ、警官ですか。TPのファンだったんでしょか。」

「じゃないの？ 知らないけど。チャミーがいるってことは、僕たち潮時みたい。この辺で失礼するよ。」

「そうですか、しばらくはこちらにいらつしやるんでしたっけ？」

「うんまあ、そのつもり。」

「それじゃ、またお会いできますね。」

「多分ね。じゃ、ヴォルフ、スタングを列から引っぱり出せ。」

「へいっ。」

ヴォルフがスタングを列から引っぱり出したのと、チャミー警部補がストコドッコイに気づいたのが、ほぼ同時だった。

「あーっ、ストコドッコイの野郎！」

TP（ミラー）の肩を抱いていたチャミー警部補が突然怒鳴った。そして、ミラーも、眼鏡をかけていたので、オデコで金髪、小柄な人物を見つけた。

『あれは確か、僕んちでマードックさんと一緒にいた人で、ってことは仲間だってことで、ってことは助けなきゃな。』

ほんくらとしか思えないミラー氏も、その昔はTPとして孤児院でこっそり身勝手の限りを尽くした頭脳派。やる時はやるのだ！

「ええと、あなた。」

と、ミラーは先刻サインした色紙に目をやった。そこには、「チャミー警部補へ、テネシー・ミラー&キャプテン・ロンパース」と書いてある。

「チャミー警部補、どのキャラがお好きですか？」

「え？ そうだな、やっぱりキャプテンかな。」

警部補は、ミラーに尋ねられて、ストコドッコイから視線を外した。その隙にしゃがみ込むストコドッコイ。つられてキンケイド氏もしゃがみ込む。

「一段落したら僕の方から連絡するよ。」

「私、年内はマンションの方におりますんで、自宅の電話番号もお知らせしておきましょう。」

しゃがみ込んだまま、キンケイドは名刺を出して、その裏に自宅の電話番号を書き込み、ストコドッコイに渡した。

「それじゃ、楽しいパーティをありがとう。」

「ご出席下さってありがとうございました。メリー・クリスマス！」

しゃがんだまま去っていくストコドッコイに、キンケイドはしゃがんだまま手を振った。

一方、チャミー警部補はコート背面にキャプテン・ロンパースを描いてもらっていた。周りの他のファンたちの羨望的となりながら。

「ミラー先生！ 僕にもキャプテンを描いて下さい！」

「いやあ、この人だけ特別にね。僕たちの生活を守ってくれてるL市警の人だから。それも警部補さんだし。」

チャミー警部補の背中に、キュッキュッと油性ペンを走らせるミラー。さすがプロだけあって、見る見るうちにキャプテン・ロンパースが出来上がっていく。

その隙に、ヴォルフとスタングも、何知らぬ顔で出入口に向かった。

会場前のロビーで合流したロシアン・マフィア三名。MPや警察がここに結集しているとはかり思っていたのに、そこには赤子を抱えてうとうとしているガブリエラしかないなかった。

「おかしいな、表にヤサツがわんさと来てやがったのに。」

スタングがキョロキョロと辺りを見回した。

「チャミーは偵察に入ってきただけだろ。奴が外に僕たちのことを報告したら、警官隊が一気に雪崩れ込んでくるって寸法じゃないかな。」

「で、どうやって逃げよう？」

ヴォルフが聞いているのに、ストコドッコイはその言葉を無視して、ガブリエラの方にすたすたと歩み寄った。

「こんにちは、お嬢さん。」

「は、はい？」

久々に「お嬢さん」と声をかけられて、ガブリエラは

一瞬びくりした。自分のことではないのかと思って。しかし、周囲に他の女性はいない。

「いやあ、可愛い赤ちゃんだ。天使みたいだね。」

「ええ、アンジェロって名前にする予定なんです。」

「そりゃあいい。ところで、トイレってどこにあるのかな？」

「表側のトイレでしたら、右に曲がってすぐです。でも、殿方用の方はどうか知りませんが、婦人用の方はいつも混んでいるので、左に行つて、突き当たりを右に行つたところのトイレをお勧めします。」

長時間ここについて、すっかりトイレ事情に詳しくなったガブリエラが、要らんことまで説明する。やはり、自分の子供のことを「可愛い」と言ってくれば、悪い気はしないものである。

「ご丁寧に、どうもありがとう。」

そんなストコドッコイを怪訝な顔で見ている部下二名。

「親分、尿意ですかい？」

「ん、まあそんなとこ。」

そうしてロシアン・マフィア三名は混雑していない方のトイレへ行き、ストコドッコイは念入りに手を洗い、キビヤクの臭いが落ちたかどうか、手の匂いを嗅いだ。

「さて、と。ここではしばらく様子を見ようか。」

ゆったりとした調子で、ストコドッコイは部下たちに言った。

チャミー警部補は背中にキャプテン・ロンパースを背負って、いい気になっていた。なぜなら、ミラー氏のファンたちが彼の後ろ姿を撮影し始めたからだ。

そんな頃、ゴミ箱に詰まったゴミとAチームの面々は、ハナコさんに押されて難なく廊下を通り、着々と駐車場に近づいていた。ところでハナコさんだが、通りすがりの清掃係に合気道の一撃をかまし、まんまと清掃係の制服を手に入れたのだった。なので、ゴミ箱には、ゴミとAチームと、それから清掃員のおばちゃん（気絶中）とキモノまで入っていて、狭苦しいことこの上ない。でも、それ以上に臭いのだから、Aチームは文句を言わなかった。

「おい、お前。」

駐車場の入口で、ハナコは呼び止められた。ブルーの制服を着た警官と、深緑色の制服を着たMPとが並んで立っている。

「ゴミはゴミ集積所だろ？ 何で駐車場に来てんだ。」

「あの、私、新入りで、迷ってしまつて。」

ハナコが何気なく答える。

「それにしても臭いな。」

警官がゴミ箱の蓋をそつと持ち上げた。

「おいおい、余計に臭くなるだろ、閉めろ。」

MPが蓋を上からボタンと叩く。

「危ねえな！ 指挟むとこだったろ！ 中にその何とか言う奴らが隠れてるかもしれないじゃないか！ 探してんのはお前たちの方なんだろ、俺たちは協力してやつてただけなんだからな。」

「あー、わかつたわかつた、済まん。だが、こんなきつい臭いの中、誰が隠れられる？」

「それもそうだな。ああ、これ、今朝ニュースでやつたアレじゃないか。ホテルの従業員が気絶したつてやつ。」

「世界の醗酵食品か。遂に捨てたんだな。」

「済みません、私はどうすればいいでしょうか？」

MPと警官の話がなかなか終わらないので、ハナコが口を挟んだ。

「さつさとゴミ集積所に行け。場所は、俺たちも知らない。」

口をへの字にして、ハナコは再びゴミ箱を押し、Uターンした。そして、後ろをちらりと見る。

「奴ら、背中を向けました。ちょうど我々の真後ろです。」

ゴミ箱に向かって、そう囁く。その途端、ゴミ箱から黒い腕がニュッと出た。その手の先にはシュールストレミングの缶が握られている。ハナコは、さつとしゃがんだ。

ブンッ！

シュールストレミングの缶が飛んだ。

「な、何だ？」

後方から何かが飛んできて、MPと警官はそちらの方

を見た。未確認飛行物体（缶）は、彼らの少し前方の天井にゴンッとぶつかったかと思うと、四方八方に臭い汁および臭い魚を勢よく撒き散らした。

「うわっ！」

「臭っ！」

二人は咄嗟にダルマ浮きのポーズで身を屈めた。

「今よっ！」

ハナコが叫んだ。と同時に、ゴミ箱の中からコングとハンニバルとが飛び出し、MPと警官の無防備な頸椎にチョップをお見舞いした。シュールストレミング汁の上にはばったりと倒れる警官とMP。

その間に、フェイスマンは清掃係のおばちゃん（シュミーズ姿）をゴミ箱の外に運び出してエレベーター前にそつと下ろし、マードックはハナコさんのキモノを纏い、残りの缶詰を慎重に持ち出した。

そうしてAチームとハナコさんは無事、バンに乗り込んだ。

「ハンニバル、行き先は？」

運転席に着いたコングが尋ねる。

「とりあえずマンションだな。シャワーを浴びんことにな、飯も食えん。」

リーダーの言葉に一同は無言で頷き、コングはキーを回した。

有頂天でいたチャミー警部補も、いい加減、背面ばかり撮影されるのに飽きてきた。誰も彼の前面を気にしていないのだから。そして、それと共に、彼は自分に課せられた任務を思い出した。さらに、偶然発見した人物についても。

彼の任務は、パーティー会場に潜入し（入場料をちゃんと支払って）、パーティーが終了する寸前に、その旨マコミック警部に知らせること十内部の状況を伝えること。特に、Aチームとやがらがいるかどうか、いたとしたら何をしているか、を。そのために、チャミー警部補はAチームの面々の人相をばつちり教え込まれていた。

幸いと言うか何と言うか、Aチームとやらは会場内にいなかったが、ロシアン・マフィアの親玉、イワン・スットコドツコイを会場内に発見した。これは早いところ

マコミック警部に伝えなければならない。……とは言え、発見してから既に三十分は経過しているのだが。

「警部、大変だ。スットコドツコイがいた。」

チャミーは未だに背中の写真を撮られながらも、懐からトランシーバーを出し、そう告げた。

『何だと、スットコドツコイが？』

『ああ、三十分ほど前に見かけたぜ。』

『三十分前？ 三十分間、お前は何をしとったんだ？』

『えーと、その、Aチームを探したり。』

『馬鹿もん、すぐに報告しろ！ で、今も奴はそこにいるんだろ？』

『いやあ、それがその、見失っちゃって……。』

『馬っ鹿もーん！ 弾丸のチャミーと異名を取るお前が何しとるんだ！ 探せ！ スットコドツコイを……。』

おい、何するんだ、私のマイクだ……（遠くで何やら言い合う声）……MPのデッカー大佐だ。Aチームは発見できたのか？』

『全く見つかりませんでしたぜ。』

『変装している可能性もある。特にスミスは変装している可能性が高い。もつと腰を入れて探せ！』

『変装されてちゃ発見は無理だと思っんですがね。』

『パラカスを探してみろ。奴は目立つからな。』

『了解。』

『引き続き、スットコドツコイも探すんだ！』

マコミック警部の声が、そう言った。

『へいへい。』

チャミーはトランシーバーのスイッチをオフにした。警部さん。』

その途端、話しかけてきたのは和服を着た男性だった。当然、クツワダ氏である。

「いや、俺あまだ警部じゃなくて警部補なんだけどな。」

「もうすぐ警部に昇進できますよ。これ、お一つどうですか？ 私とミラーとで焼いたパイなんです。」

と、ミンスミートパイを一切れ盛った皿を差し出す。主にクツワダさんが焼いたんだけどな。

「ミラー先生がお焼きになったパイか！ いただきます！」

パイをばくつくチャミー。この後も、次から次へとマ

ンションの住民が現れ、チャミーは足止めされ続けた。そんなチャミーの横で、ミラーは伝令係のオリバーにウィンクをしようとして失敗した。変な顔をしているミラーにオリバーはにつこりして親指を立てて見せた。

MPと警察が踏み込んでくる気配もなく、トイレの三人男は次なるアクションを起こした。つまり、外の奴らに気づかれることなく、こっそりと出ていこうってわけだ。

ホテル内に踏み込んできてはいないが、ホテル周辺をがっちり固められているのは確かである。トイレの前を歩いていく従業員たちがそう話していたのだから。となると、そう簡単にこっそりと出ていけるわけもない。

「踏み込んでくれた方が楽なのになあ。」
洗面台に座って足をブラブラさせながら、スットコードコイは呟いた。

「何で踏み込んでこないんですかね？」

壁に凭れたヴォルフが尋ねる。

「MPと警察が喧嘩でもしてんじゃない？」

のほほんとスットコードコイは答えを出した。すつこくいい加減に。

ホテル正面では、スットコードコイが適当に言った通り、MPと警察が喧嘩を始める一歩手前だった。チャミーから「スットコードコイが会場内にいた」と連絡を受けたマコーミックが「今すぐ突入する」と喚き、そのマコーミックに「パーティが終わるまで突入は控えて下さい」と言われたデッカーが「文化と芸術の都LAで突入なんて野蛮なことはいかなあ」と厭味つたらしく言った上に、「潜入させる人選を誤ったんじゃないか」とも漏らしたため、MPと警察の間には、大きな溝ができていた。マコーミック警部を抑える部下たちと、デッカー大佐を抑える部下たちとは「お互いに苦労しますなあ」といった感じで、それほど対立してはいないのだが、トップの二人がいけない。言い直そう、喧嘩を始める一歩手前なのは、MPと警察ではなく、デッカーとマコーミックの二人だけであった。

と、その時。

ブオオオオオーン！ キキッ、ブオオオオオーン！
駐車場の方から紺色のバンが姿を現し、MPと警察とが待機している車道に出てくると、急に方向を変え、トップスピードで走り去った。

「Aチームのバンだ！ 追え！ 追うんだーっ！ 全員、乗車ーっ！」

それを見て、デッカーが声を限りに叫んだ。きびきびと車に乗り込むMPたちと、ぼんやりとしている警官たち。

「お前たちも乗車だ！」
総指揮官であるはずのデッカー大佐が、マコーミックや警官たちに怒鳴った。

「我々はこのに残ります。車を追うのはMPだけで十分なんじゃないですかね？ それとも、一台の車を追跡するのに、MPの力だけでは心許ないでても？」

「ああ、わかった。我々だけでやってやる。お前らは日が暮れるまでずっとそこでそうしてろ。行くぞ、C！」

「はいっ！」

デッカーは部下Cが既にエンジンをかけて待機していた車の助手席に飛び乗った。

ホテル前に陣取っていた人数と車体数が半分になった。

「おい。ロシアン・マフィアのイワン・スットコードコイがホテルから出ていくのを見かけた奴はいるか？」

マコーミック警部は部下たちに尋ねた。しかし、ホテルの周囲にいるすべての警官たちから「ノー」との答え。「ということは、スットコードコイはまだホテルの中にいる。」

警部は重々しく呟いた。

「もしくは、さっきの車に乗って逃げたか。」

部下の一人が、マコーミックのすぐ傍でボソリと言った。

「その可能性もあるが、そっちはMPの方々が何とかしてくれと信じているからな。」

実のところ、全然そんなこと信じていないのだが。それは彼の表情からありありと見て取れた。

現在、午後一時五十八分。ホテル周囲を取り囲んでか

ら、約一時間が経過している。そろそろパーティもお開きのはずだ。

「よし、午後二時〇分に突入だ。」

マコーミック警部は、部下たちにそう指示を出した。

「チャミー警部補からの連絡は？」

「知るか、あんな脳足りんのことなんぞ。」

忌々しげに言い捨てるマコーミック警部であった。

十分後。ロシアン・マフィアの面々は、壁と格闘していた。正確には、スットコードコイの指示を受け、ヴォルフの上で、スタングだけが、壁に嵌った鉄格子と格闘していたのだが。

「痛たたたた、頭踏むな頭っ。」

「仕方ねえだろ、位置が悪いんだ。」

「ずれるから待て、ずれるから！」

ヴォルフは、そう言うのと、四つん這いのまま後ずさった。上に乗っているスタングは、バランスを崩しつつも何とか体勢を保ち、壁の高いところにあるダクト穴の鉄格子に手をかけ、ばきっとそれを外してしまった。

「外れましたぜ、親分。」

スタングはそう言うのと、ヴォルフの背中からひらりと飛び下りた。ちよつとヒーロー気分で。

「痛っ。」

革靴で背骨を踏みにじられたヴォルフは、ヒーロー気分皆無。どつちかつつと被害者気分。

「ご苦労さん。」

どんな気分でもなく、飽くまで平常心で足をブラブラさせていたスットコードコイは、びよん、と洗面台から飛び下りると、そのままヴォルフの背中に着地した。

「痛っ！」

ヴォルフが、また叫んだ。スットコードコイは、ヴォルフの叫びを完全に無視し、再度攻撃力のありそうな足踏みで勢いをつけると、垂直跳びで壁に開いた穴の縁に手をかけ、うんしょつとよじ登ろうとした。が、腕力の不足か、ウエストまでしか上がらない。スタングが、慌てて親分の尻を押し上げる。

「ありがと。さ、行くぞ。」

よじ登ったスットコードコイは、一息つく間もなくダ

クトの奥へと消えていった。慌てて後を追う子分二人。スタングがそれなりに、ヴォルフが背中の痛みを気にしながらあたふたと、ダクト穴に姿を消したとほぼ同時に、パーティの客が一人二人とトイレに入ってきた。

三人は、辛うじて中腰で立てる程度のダクトの中を、あちこちにゴチゴチ当たりながら何とか進んでいた。「方向音痴だから前行って」というストコドツコイの命令により、先頭はヴォルフ、真ん中がストコドツコイ、そしてしんがりがスタングである。(因みに、狭いダクト内でのこの隊列変更は、結構大変だった。)

「親分。」
五十メートルほど進んだ時、先頭のヴォルフが不意に振り返った。

「何だい？」

「道、分かれてやすぜ。左と右に。」

「ふうん。で、どっちが正解？」

「わかりやせん。多分……左かと思うんですけど。」

「わかるうよ、それくらい。」

「そんな、ご無体な。」

「仕方ないなあ、スタング、どっちだと思う？」

「ええと、トイレが西側にあって、そこから左に進んで(→東西南北と左右が混在してる時点でもうヤバイ)、うっすらカーブしてたから……右ですぜ、親分。右に行きやあ、外に出られるんじゃないかと。」

「オッケー、頼りになるね。じゃ、行こうか。」

そして三人は、右の道を選び、再び進み始めた。真っ直ぐに、パーティ会場へと向かって。

コングは緊張の面持ちでハンドルを握っていた。目は開きつ放しで、瞬きをする余裕もない。なぜなら今日はクリスマス。ミサを終え、昼食を摂り、さあ我が家へ帰ろうじゃないか、という人々で街は溢れ返っている。みんな、ゆったり寛ぎモードだ。それも、ここは天下のハリウッド。観光客もわさわさとしていて、邪魔臭いことこの上ない。そんな中を疾走する紺色のバン。ハリウッド大通りを東に向かってノースハイランド大通りを北上し、ハリウッド・フリーウェイに入る予定だったのに、MPの追跡を気にしすぎて左折し損ね、現在、ハリウッ

ド大通りをひたすら東に向かい、このまま道なりに行けば、ウェストサンセット大通りを南東に下ることになる。

三種のベダルをエレクトーン奏者のように器用に踏み踏み、右へ左へ巧みにハンドルを操る真剣なコングの横で、ハンニバルは寛ぎモード。葉巻を銜えて、その身をゆつたりとシートに沈め、バックミラーを見つめている。ハンニバルの後ろでは、フェイスマンが己の匂いをくんかくんかと嗅いでいる。臭いはずなんだけど、鼻が麻痺してしまっ、臭いと思えないのが怖い。コングの後ろには、右へ左へと揺れまぐる車の中で、爆発寸前のシュールストレミング九缶が爆発してしまわないよう、細心の注意を払っているマードック、およびハナコさんニトグリセリンの運搬にさも似たり。

「待てーい、スーミスー！」

後方からデッカーの怒声が微かに聞こえた。バックミラーにも、MPカーが小さく映っている。

「ハンニバル、本っ当にマンションに向かうんではないのか？」

前方を見据えたまま、コングが尋ねた。

「そうだよ、ハンニバル。デッカーにあのマンションのことがバレたらどうすんの？」

座席の後ろからハンニバルを覗き込むようにして、フェイスマンも尋ねる。

「ふむ、それじゃちよっくら遠回りして帰りましょうかね。」

既に遠回りになっているのに気づいているのかいいいのか、ハンニバルがのんびりと言った。

「遠回りだろうが何だろうが、フリーウェイに乗んねえと、MPの野郎ども、振り切れねえぜ。」

コングの言う通りである。アクセル全開にできれば、MPカーを振り切ることなど、そう面倒なことではないだが、アクセル踏み放しというわけにもいかないのが現状である。

「それは最後の手段でしょう、軍曹。」

どうやらハンニバルは事を簡単には運ばせたくないようだ。

「徐行で西へ。」

リーダーの命令に、コングは仕方なくハンドルを右に

切った。

ビバリー大通りを徐行で走るAチームのバンに、デッカーは怪しむこともなく部下Cにスピードアップを命じた。後続の部下にもハッパをかける。

「行けーい、行くんた、C！ Aチーム逮捕も目前だ！」

「はいっ！」

ぐんぐんとバンに追いついてくるデッカーと部下C。だが、その時。

Aチームのバンは急にスピードを上げ、何かを避けるように大回りをして右折した。そして、デッカーの目に映ったのは、冬季限定焼き栗の屋台だった。バンに遮られて、今の今まで見えなかったのだ。

事態を察して、建物の方に横っ飛びで避難する焼き栗屋の店員。次の瞬間。

ドガースーン！

MPカーが焼き栗の屋台に突っ込み、四方八方に焼き栗をばら撒いた。そして、焼き栗金つき屋台と共に、車は隣のブロックの建物の壁面に衝突した。

大破した車から這い出てくるデッカー。反対側のドアを蹴り開けて、部下Cもよろよろと出てくる。

「おのれ……！！」

悔しげにルーフに拳を叩きつけるデッカー。その衝撃のせいか、焼き栗金の炭のせいか、MPカーのエンジンが爆発し、真上に炎を吹き上げた。

「うおっ！」

慌てて飛び退くデッカーと部下C。その周囲に、車を降りたMPたちが集まってきた。

「大丈夫ですか、大佐殿！」

地面に倒れ伏したデッカーを助け起こす部下たち。しかし、デッカーはその手を振り払って立ち上がり、制帽をキュッと被り直した。

「俺に構わず、お前ら、Aチームを追えーっ！」

「はっ！」

デッカーに敬礼し、再度、車に乗り込むMPたち。だが、しかし。

ブシューッ！(×九)

「うわーっ！」(×九)

ある者は車から逃げ出し、ある者は車を出鱈目に動かし、ある者は車ごと壁に追突した。そう、MPらが車から離れた隙に、路地に隠れていたマードックとハナコさんおよびフェイスマンが、シュールストレミングの缶をMPカーにセットしたのだ。ドアとシートの隙間や、運転席の座面や、アクセルペダルの上や、その他の箇所に。軍人というものは、往々にして動きが粗い。爆発寸前のシュールストレミング缶の気配を察知し、ふんわりやんわりと扱ってやる、などということは、決して軍人にはできない。したがって、九つのびっくり箱（悪臭つき）は漏れなくMPを恐怖のどん底に突き落としたのであった。

惨状を目の当たりにし、デッカーは両手の拳を握り締めて呟いた。

「おどでスビスベ……。いばでいびでいど……。」「とまあ、そのぐらい臭かったのである。

「親分。」

中腰でいるのが辛くなり、四つん這いで先頭を這うヴォルフが、後ろのストコドッコイを振り返って言った。振り返ったって、暗いダクトの中、ストコドッコイの姿は見えないのだが。

「何？ また何かあった？」

「いえ、ちよっと思っただんですけど、何で俺たち、ダクトん中を這いずってんですかね？」

「ダクト、嫌い？」

「好き嫌いの問題じゃありませんぜ。ダクトを通ったからって、外に出りゃ警官がホテルを包囲してるわけで、そんなら、どっから出たって同じじゃないっすか。それに、今まだ警官はチャミー一人が会場にいるだけで、他の奴らはホテル内に入ってきてねえわけだから、何も俺たち、ダクトん中、通んなくても……。」

「あー、そういうことね。別に、ダクトを通して外に逃げ出そうってつもりじゃないよ。」

「外に出んじゃねえのか？」

ストコドッコイの後ろから、スタングの声がそう聞いた。

「ま、出られるんなら、それに越したことはないけど

ね。」

説明を続けるストコドッコイ。要約すれば、警官が突入してきた時に備えて、ダクトに身を潜めている、というわけである。外に近いダクトに隠れておいて、もしその近辺から警官が姿を消したら外に出る。しかし、ホテル周囲を見張っている警官がすぐに姿を消さなくても、いつかは撤退するのだから、それまで発見されなければいいのだ。

「赤ん坊抱いてたおばさんが、きつと、僕らはトイレに入ってた出できてないって証言するだろうけど、僕はトイレにはいない。マコーミックだったら、僕らがどっからするっと逃げおおせたと思ってくれるんじゃないかな。いつも、そうやって逃げてるわけだし。でも残念、僕はダクトの中にいる。マコーミックが『このホテルの中には、奴らはもういない』って思ってくれば、それでOK。」

「なるほど、さすが親分、冴えてやすね。」

スタングが言った。だが、彼、親分の言ったことの半分も理解できてないと思われます。

「……それだったら、ダクト穴の鉄格子、元に戻しとくべきだったんじゃない？」

親分の言ったことを八割方理解して、ヴォルフが尋ねる。

「え？ 鉄格子、元に戻してなかったの？ スタング、君、鉄格子どうした？」

「鉄格子ですかい？ えーっと、外して、床に置いて、それっきりですぜ。」

ストコドッコイは、落胆振りを無言で表現してみたが、それがスタングに伝わるとは到底思えなかった。

「俺らがダクトん中にいるの、警察にバレバレですぜ、親分。」

「……じゃあ計画変更。とにかく外に出る。警官がいたら、倒す。」

「了解。」

そう返事を聞いた直後、ストコドッコイの前方からヴォルフの気配が消えた。前に手を伸ばすも、あるはずのヴォルフの尻がない。ないのは尻だけじゃないんだが。

「あれ？ ヴォルフ？ う、うわ！」

中腰で歩いていたストコドッコイだったが、踏み出した先の、あるべきはずの位置に底面がなく、バランスを崩した。幸い、全く床がないわけではなかった。ただ、下降斜面になっていただけだ。前のめりになった彼は、膝と脛とを床について、多少、滑り落ちたが、掌と爪先でブレーキをかけて持ち堪えた。

「ヴォルフ、大丈夫？」

下前方に向かって尋ねる。

「何とか。……親分、ここ、鉄格子のどこなんですけど、鉄格子の向こう、あのパーティ会場ですぜ。」

「何だって？ それ、まずいじゃん。スタング、嘘ついたね？」

上後方を振り返って、ストコドッコイは言った。しかし、スタングはそれには答えず、ただ「うおー」と吠えているだけだった。その声が非常に近くなり、ストコドッコイは尻と背中中に衝撃を受けた。

そう、スタングが滑り落ちてきたのである。転げ落ちてきた、と言う方が近いかもしれない。

そして、スタングとストコドッコイは共に落下し、ヴォルフの上に落ちた。

「ぐえっ！」

でも大丈夫、ヴォルフの向こうには鉄格子があるから。と思いきや。

ミシミシミシ……バキッ！

鉄格子は三人の重さに耐えきれず、枠から外れた。

「うわーっ！」（×三）

三人は一団となって、もとい、団子状になって、鉄格子と共にパーティ会場に落下していった。

ロシアン・マフィアがトイレの鉄格子を外し終えた頃、午後二時〇分ちょうどに、LA市警の一同は、マコーミック警部を先頭にハリウッド・ルーズベルト・ホテルに突入し、ロビーを進み、ガブリエラと赤ん坊には目もくれず、WTPP会場に雪崩れ込んだ。

「LA市警のマコーミックだ！ この会場にロシアン・マフィアの幹部がいる！ 全員、床に伏せて、手の上の組め！」

警部はバッチを高々と掲げて叫んだ。しかし、会場内

の誰も、聞いちゃいない。

と言うのも、ミラー先生のサイン会が一段落した後、ステージ上で改めて、ジェイソンからテンピーへのチョコバーのブーケ贈呈式が行われている真っ最中だったからだ。

「テンピー、君の大好きなチョコバーだ。僕は、君にも一度チョコバーを渡すんだって、心に決めてたんだ。」
「ああ、ありがとう。チョコバーなら大歓迎だよ。一度と言わず、何度でもくれるといいんだけど。」

好物のチョコバーを貰って、ミラーも機嫌がよかった。ジェイソンに抱擁されながら、早速チョコバーを貪り食うミラー氏。会場が大きな拍手に包まれ、啜り泣く『どうして?』ファンも続出。マスコミはフラッシュを焚きまくっている。

「再会おめでとう、ジェイソンとテンピー。」

会場内のどこから、そんな声が上がった。その言葉は参加者たちによって何度も繰り返され、最後には全員で唱和した(警察関係者を除く)。

「ありがとう、皆さん!」

ステージ上で、ジェイソンはミラーの肩をぐつと抱き、空いた手をファンに向けてぶんぶんと振りながら号泣していた。

「ありがとう! みんなのおかげでテンピーに会えた! 今日最高のクリスマスだ!」

ぼろぼろと感動の涙を零して、ジェイソンが叫ぶ。

『クリスマスになったら、またあおうね』……その台詞通り、クリスマスにまた会えたのよ、ジェイソン、テンピー。本当に……本当におめでとう!」

マリアンも、涙のせいで切れ切りに言葉を紡ぐ。ステージの袖ではキムも手放しで泣き喚いているし、ステージ下ではマンシヨンの人たちみんながハンケチを目に当てている。オリバーとユリアに至っては、生まれて初めての大感動に、立っっていられず、床に座り込んでしまっている。

そんな時に警官が突入してきたって、誰も聞いちゃいない。気づいてさえないない。

「どうします、警部?」

部下の一人が、マコーミックに尋ねた。

「仕方ない、我々全員でストコドッコイを探そう。」

「チャミー警部補はどうします? あそこにそれらしき人物がいるんですが。」
「放つとけ。」

そうして警官たちは、感動の渦中にいる人々の顔を、一人一人覗き込んでいった。だが、どうもはつきりしない。ほとんどの人がハンケチで涙を押さえていたり、鼻水を拭っていたりする上に、誰も彼も臉が腫れぼったくなっている、人相を判別しにくいのだ。

それでも何とか「ここにストコドッコイはいないんじゃないかなあ」とマコーミックが察し始めた頃、ステージ上の女性(マリアン)がマイクに向かって言った。「ハプニングも多々ありましたが、感動のWTPP、これにてお開きにいたします。皆様、どうもありがとうございました。これからも、ジェイソンと、テンピーことミラーさんのことを見守っていきましょう。」

盛大な拍手の中、司会の女性(マリアン)はステージを後にした。ステージを照らしていたスポットライトが消え、照度をやや落とされていた会場内の電気が次第に明るくなっていた。そこに、アナウンサーが入る。

「午後三時までは、皆様、ご自由にお寛ぎ下さい。」

興奮状態にあった会場の人々も落ち着きを取り戻し、マコーミックたちの方をちらりと見ながらも、帰途に就いたり、談笑を再開したり、クリスマス料理を平らげにかかったりし始めた。

と、その時。

「うわーっ!」

壁面上部(ほぼ天井の下)の通気口から、でかい塊が落下してきた。

天井から落ちてきた塊は、着地と同時にばらけ、三体の人影となった。

「いってえー。」

「こ、腰、腰打った……。」

口々にそう言いつつ床に転がるヴォルフとスタンゲを尻目に、しゅたつと立ち上がったストコドッコイは、上着の裾を直しつと辺りを見回した。感動の再会で泣き腫らしていた人々が、今度は何が始まるのかという好奇の視線でストコドッコイたちを取り囲んでいる。その

向こうで、ぽかんと口を開けてこつちを見ているのは、あろうことか、マコーミック警部。だが幸いなことに、まだ脳味噌までストコドッコイの存在が達していないようである。

すると、ストコドッコイに、後ろから声をかける者あり。

「やあ。あなたは本当に意表を突きますねえ。」

「まあね、で、どう? パーティは終わったの?」

振り返ったストコドッコイは、声の主、キンケイド氏にこやかに答えた。

「ええ、今、お開きですよ。」

「ちょうどよかった。じゃ、これ。」

そう言うと、ストコドッコイは靴を片方脱いだ。

「あ、それですね、ハイハイ。」

キンケイド氏も、ごく当然のようにそれを受け取る。「反対側にもう一個穴あるから、ええと、楊枝、楊枝。」

ポケットを探すストコドッコイに、キンケイド氏が近くのテーブルからすばやく楊枝(唐揚げとイギリス国旗の飾りつき)を取り上げて渡した。自分も一個取り上げて、唐揚げを口に放り込み、空いた楊枝でストコドッコイに渡された靴の踵を突く。

「じゃ、行くね。」

ストコドッコイはそう言うと、懐から取り出したスティック糊の蓋を外した。そして二人は、またもやシューという音を聞きつつ、しばし佇んだのであった。

会場を出てすぐのロビーでは、赤ん坊を抱いてソファに座るガブリエラの周りに、マンシヨンの人々が集まっていた。ジェイソンがまだガブリエラと新生児に顔を合わせていなかった。ガブリエラはジェイソンがまたよたと会場に入っていく姿を「あら? あれ、ジェイソンかしら?」という程度に見てはいたのだが、ジェイソンはその時、それどころではなかったので、ガブリエラに気づいていなかったのだ。

「うわあ、生まれ立ての赤ちゃんって、ちっちゃいんだなあ。」

赤ん坊の手を握ってそう言うジェイソンの脳内には、次作絵本の構想が渦巻いていた。

「もうちょっと小さい方が、私は楽なだけけどね。この子は大きい方だよ。」

アントワネットさんがしみじみと言う。

「なかなか産まれてくれなくて、ママ、大変だったのよ。」

ガブリエラの脇にちよこんと座って、足をブラブラさせるユリア。もちろん、ユリアの正面には、にこにこの顔のオリバーが立っている。そして、そのオリバーの後ろにはマリアン。その横にはキム（レオタード姿）。で、ユリアがいる方とは反対側のガブリエラの隣には、これまたにこにこの顔のフリオ。

当然、マスナンさんもハイデン夫妻もヤンソン夫妻もあり、少し離れた場所には依然としてチョコバーを食べ続けているミラーと、フアンの人々からテンピーへの贈り物をつっ込んだ紙袋を提げて佇んでいるクツワダ氏の姿もある。

「こうやってマンションの全員が揃うのも久しぶりよね。」

腕組みをしてキムがうんうんと頷きつつ言う。すっかりエヴェレット氏のことは忘れていた模様。それからドゥーニ君についても。ヤンソン・ブラザーズについても。

「そう言えば、ダディは？」

オリバーが周囲を見回して、マリアンに尋ねた。

「まだ会場の中にいるんじゃないかしら？」

「僕、連れてくる。いつとも仲間外れっぽくて可哀相だからね。」

そうやってオリバーは、警官隊が来てから開閉のたびに閉められていた分厚い扉を「よっこいしょ」と全体重をかけて引っ張った。

「手伝うわ、オリバー。」

「ありがとう、ユリア。」

ユリアも駆け寄ってきて、二人で一緒に扉を引っ張る。そんな二人を微笑ましく思いつつ扉の方を見ていたマンションの人々が、開かれた扉の向こうに見たものは……床に倒れ伏すフアンの皆さんと警察一同の姿（主に背中と尻と足）。

呆然とその光景を見つめるしかなかった。

「……何、これ？ 何があったの？」

ややあって、最初に口を開いたのはマリアンだった。しかし、誰も答えられない。

「うっ……！」

ハイデン夫人が左胸を押さえて屈み込んだ。

「お、おい！ 大丈夫か？」

慌ててハイデン氏は夫人のハンドバッグから薬を探し出し、妻の唇の間に押し込んだ。キムも駆け寄って、夫人の脈を取る。

「心臓発作ね、ソファに寝かせて。」

ガブリエラに抱かれた赤ん坊が、周囲の不安を感じ取って泣き出した。

「そう言えば、あの人は？ ブライアン！」

マリアンは会場の中に駆け込んで、夫の名を呼んだ。

「何だい？」

くぐもった声が返ってきた。声の方を見ると、顔面に靴を括りつけた人物が二名。そのうちの小柄な方が、腕時計を見て靴を顔から外した。それに倣って、もう一人も靴を外す。

「あなた！」

「うん？」

「何なのよ、これ？」

と、マリアンが足元の人々をぐるーりと指し示す。

「ああ、寝てるだけ。」

マリアンが棒に代わる何かを探している間に、スットコドッコイは、眠っているヴォルフとスタンクの口の中に、皿に残っていたホンオ・フェを突っ込んだ。

「う、うん。」

目覚めるヴォルフとスタンク。寝惚けてホンオ・フェをもぐもぐしてしまい、ガバツと飛び起き、ベツと刺身を吐き出す。

「いやあ、済みませんね、マダム。」

そこいらに転がっていた大足の男の足から、棒の代わりとして靴をもぎ取ったマリアンに、スットコドッコイはにこやかに話しかけた。

「実は僕たち警察に追われているもので、一時的に眠ってしまいました。あと十分もすれば、みんな起きると思うので、後はよろしく。」

それからスットコドッコイは、立ち上がって伸びをし

ている部下二名の方に怒鳴った。

「ほら、行くぞ！」

「へいっ！」

早速で扉に向かうスットコドッコイの後を小走りで追いかけるヴォルフ&スタンク。

「あ、マダム、素敵なパーティをありがとう。メリー・クリスマス。」

扉のところで、スットコドッコイはマリアンに向かってそう告げた。

「どういたしまして。メリー・クリスマス。」

そう返事するしかなかったマリアンは、三人が会場から消えた後、キンケイド氏の頭をリーガルの踵でスパーンと叩いた。

ハリウッド・ルーズベルト・ホテルで発生した客および警察官の失神騒動は、「世界の醗酵食品の悪臭による失神騒動の続き」として、翌日の新聞の三面の隅を飾った。しかし、事件を担当する市警の一員が、「酔っ払って」パーティ会場で気を失っているのが発見されたせいもあり、事件なのか事故なのか分からぬまま、翌日の夕方には有耶無耶な終焉を迎えたのであった。

「やあ、テンブルトンたち、まだいたの？ もう留守番はいいのに。」

WTPPの後、あちこちのパーティをハシゴしていたマンションに戻っていなかったジェイソンが帰ってきたのは、翌日の午前中。そして開口一番が、これ。

「お帰り、ジェイソン。ええっと、これが君の休暇中やつつけた依頼。」

随分な言い方にもめないフェイスマン。なぜなら、夕べから今日にかけて、久しぶりに休みらしい休みを満喫したから。と言っても、ジェイソンの部屋で思い思いに惰眠を貪ったり牛乳を飲んだりしていただけなのだ。忙しすぎた日々が、彼らの中の幸せのハードルを恐ろしく低くしてしまったようだ。

「わお、大量だね。すごかっただろ？ うちの住民のあれやれこれやれ攻撃。あれで家賃分だって言うんだから、まいっちゃうよな。」

分厚い紙の束を、受け取った傍から床に放り投げ、ジェイソンは四人に向き直った。

「で、も一回聞くけど、いつまでいるの？」

「そうは仰いますがね、ジェイソン。」

ソファにどっさり座って新聞を読んでいたハンニバルは、ガサゴソと新聞を畳み、腰に手を当てつつ、うんしょと立ち上がりかけ、うっ、と呻いて再度ソファに崩れ落ちた。

「あたしたちはここ数日間、家賃以上の働きは確実にしてますよ。何せコングは、大工でもないのにベランダを二回も作ったし。フェイスは変な写真家にヌード写真(う)まで撮られた上に、ミラーと間違われてえらいことになった。モンキーはモンキーで素人操縦のボーイングを着陸させましたし。」

「一生分のキャベツも削った。あれ、堅くて大変だったんだぜ。」

「あたしはあたしで、何の因果かエアロビだ。昨日までは気が張って気がつかなかったが、今朝、起きてみたら腰が痛い痛くないのって。」

「うん。みんな大変だった。サンキュー。でもそろそろ出て行った方がいいんじゃないかなあ。」

ジェイソンは飽くまで強硬姿勢を崩さない。そんなジェイソンの前に、フェイスマンがズズイと進み出る。

「あのね、俺たち別にバイト料請求しようってんじゃないの。できれば、あとちよっと、ハンニバルの腰が回復するくらいまでは、いてあげようかな、と思ってるのさ。」

「ああ。俺もハイデンさんちのベランダに流したコンクリが乾くのを見届けてからでねえと。また落ちたらことだしな。」

「というわけなんだが、ジェイソン。もうしばらく置いてくれないかな？」

「うん、君のために一部屋は空けるから。」

「ダメ。」

ジェイソン、即答。

「何だってそんなに急いで俺たちを出て行かせようとするのさ？ 俺たちがいて何かヤバイことでもある？」

「うん、ある。」

と言うと、ジェイソンは、つかつかと部屋を横切り、ベランダへと続く窓の向こうを指差した。

「あれ。」

「何だってんでえ。」

「何だ？」

「何々？」

「表に何があるって言うんだ？」

窓辺に集まる三人(ハンニバルは座したまま上半身だけそっちへ向けている)。

「げっ。」

「あらら。」

「あちゃー……。」

「何だ何だ？ 何があるんだ、お前たち。」

ハンニバルの問いかけに、フェイスマンが振り返った。「ハンニバル、まずいよ。ゲートのところにMPの車がずらっと並んでる。」

「何だって!？」

必死の思いで立ち上がって窓辺に寄り、外からは見えない角度(でもお腹の出っ張りは見えている)で外の様子を窺うハンニバル。確かに、そこにはMPの車がずらりと並び、あまつさえデッカーまでいるではないか！そして、そのデッカーの前に仁王立ちで立ち塞がり、何やら怒鳴り続けている女は……キムだった。

「というわけで、ご覧の通り、今、MPの方はキムが足止めしてる。口数だったら彼女、誰にも負けないからね。キムを突破されたら、次はクツワダさんが禪問答を仕掛ける予定。ほら。」

ジェイソンが階段の辺りを指差した。そこには、所在なさにウロウロするクツワダ氏の姿が。そしてその後ろに控えているのは、なぜかコレード一家+オリバー。お子様突撃作戦か？

「ジェイソン、これって、もしかして俺たちのために？」

「まあね。ちよっとしたお礼って言うか、何て言うか。結局アレじゃん？ テンブルトンがTPっていうイニシャルだったおかげで、僕はテンピーと再会できたんだし、マンシヨンのみんなも君たちには感謝してるみたいだからさ。」

「ジェイソン、お前、実はいい奴だったんだな。見損な

ってて悪かったぜ。」

コングががっしとジェイソンの肩を掴んだ。

「ジェイソン！」

その時、部屋に駆け込んできたのは、キンケイド氏。

「やあ、ブライアン、早かったね。」

「ああ、総務に即行で書類作ってもらったんだ。はい、これ。うちの会社のヘリのキーと、NYまでの飛行許可証。」

と言ってキンケイド氏は、フェイスマンに茶封筒(会社の名前入り)を手渡した。

「ホーボージにある本社の上に降りて下さい。鍵を総務のメリッサに渡せば、当面使える代車を出すように言ってます。車はこっちで預かって、あとでNYまで届けさせます。」

さすが石油会社の営業マン。普段からわがままな産油国の王族を接待している経験が活かしている。

「NY？ 今度は俺っちにNYまで飛べっての？」

「そう。行くところないんだったら、NYの僕の部屋に住んだらいいじゃん、て思ってた。契約、まだ半月残ってるし、僕はもう向こうに戻る気ないから。」

ジェイソンは、そう言うのと、にっこり笑った。

「そりゃありがたいね。じゃあお言葉に甘えて……。」

「いいね、NY、久し振りだし。」

「俺っち42丁目のケバブ食いたい。」

「待って待って！ ニューヨークだかニュー جيرランドだか知らねえが、俺あ飛行機はゴメンだって何度言ったらわかるんだてめ……。」

最後まで言い切らずに、コングがドサリと倒れた。

「Aチームのテーマ曲、かかる。」

キンケイド氏を先頭に、マンシヨンの裏手から、こっそりと抜け出すAチーム。某石油会社LA支社の持ちビルに移動。その屋上から離陸し、マンシヨンの上空を飛ぶヘリコプター。マンシヨンの屋上で手を振る住民たち。開け放したドアから半身を乗り出し、手を振り返すマードック。ヘリコプターは、大きく右旋回して大空に消えてゆく。

「Aチームのテーマ曲、フェイドアウト。」

「さてと、NYまでひとつ飛びだぜ！」

見送りに来てくれたマンシヨンの皆様に手を振り返すため、必然的にアクロバット操縦になつていたマードックが、操縦席に座り直してベルトを締めた。

「で、行き先はどこだっけ？ マンハッタン島？」

「ちよつと待て、確認するから。」

助手席のハンニバルが、キンケイド氏から受け取った茶封筒を開いた。鍵や書類がごちゃごちゃと入っている。

「ええと、地図、地図……何だこりゃ？ フェイス、お前宛だぞ。」

ハンニバルはそう言うのと、封筒の中からペラリと一枚のレポート用紙を取り出した。

「何？ 手紙？」

フェイスマンが後席から身を乗り出し、ハンニバルは、ホレ、とその紙をフェイスマンに差し出した。

「ジェイソンからの手紙だ。」

「ほほう、奴さん、余程お前に感謝していると見えるな。」

「当然じゃない？ 俺恩人なんだし（↑いつの間に？）。何々、『親愛なるテンプルトン。今回のことは本当にありがとう。感謝してる。』については、NYの僕の部屋にしばらく住んでいていいよ。もちろん家賃は要らない。その代わり……。」

「……その代わり？」

嫌いな予感がしたハンニバルが、すかさず聞き返す。

「『その代わりと言つては何ですが、テンプルトンにちよつとした仕事をお願いしたいんだけど、いいかな？ 内容については、添付①を参照してね。愛を込めて、ジェイソンより。』って、まあたこれかよ！」

フェイスマンはそう言うのと、天を仰いだ。

「どれどれ。貸してみ。」

マードックがフェイスマンから手紙を奪い取る。当然、その間、操縦はお留守。

「あゝ、やっぱりだよ。ジェイソンの奴、向こうでも家賃の代わりに労働って約束してる。一月半ばまでに部屋の壁塗りと模様替えだつてさ。どうする、大佐？」

「当然、こうする。」

そう言うってハンニバルは、マードックの手から手紙を取り上げると、ヘリのドアを開け、それを空に放り投げた。ついでに、キンケイド氏から預かった茶封筒も、フリスビーのように放り投げる。

「それじゃ、ハンニバル、これからどこへ行くのさ？」

「どこへなりと、気の向くままによ。」

ハンニバルは、そう言うのと、葉巻を銜えてニカッと笑った。

【おしまい】